

プロローグ

10年ほど前、我が国でインプラントを日常的に行っている歯科医院は約500軒であると聞いたことがある。現在、インプラントを診療項目に挙げている医院は1万軒をはるかに超えるという。このような短期間にひとつの技術が全国的に普及することは、尋常ではないだろう。著者も歯科医院を取り巻く状況の変化にまったく無知なわけではない。しかし、この治療法がまったく大学教育に組み込まれずして爆発的に歯科界へ普及したことで、ある意味、治療の正しいプロトコルがメーカー主導のコマーシャルリズムのなかに埋没していくことが危惧される。

さて、医学の世界では、EBM 的見地から治療の標準化が進められている。優れた治療法とは誤りや害の少ない治療である。ある治療がある患者に対してうまくいったとしても、その治療法を経験的・盲目的に信じるような思考法はEBM とはそぐわない。ましてや、そのことを自分の卓越した技術によるものと捉える愚は避けなければならない。

まあ、ここまでは賢明な読者には、いまさら言うまでもないであろう。しかし、その延長線上に技術偏重の匠的治療も存在するのである。名人やゴッドハンドは、いちかばちかの救命医療では必要かもしれない。だが、生活のクオリティーを向上させようという QOL 医療のインプラント治療にはそぐわな

い。およそ、神のごとき名人芸は、1万人もの歯科医師がマスターできるはずもあるまい。よって、臨むべくもない「手」よりも、むしろ、失敗やダメージの少ない治療法を選択するための「眼」が大切になる。

ここでいう「眼」とは、臨床的判断のための臨床的観察力であり、医学的には診断能力を指す。乱暴な言い方をお許しいただくなら、臨床力とは畢竟、^{ひっきょう}診断力と治療計画立案能力に尽きるかもしれない。

本書ではそれらをひっくるめて臨床戦略としよう。しかも、それらは客観的に症例の状況にもっとも則した標準治療でなければならない。標準治療とは、言及するのは簡単であるが、診断するのに基準が必要となることは当然である。その基準とはエビデンスであり、その背景にあるバイオロジーである。一方で、臨床にはEBMとして容易に判断できかねる項目もある。補綴的な部分には科学的な議論が難しいものも少なくない。しかし、可及的に関連する臨床ファクターを配慮に入れ、自分なりの判断をする必要があることは自明であろう。エビデンスが十分でなくとも、近年、各学会がコンセンサス会議を開催し、一定の推薦治療戦略を提案するようになった。本書では可及的にそのことも踏まえて提示した。一例を挙げれば、インプラント周囲炎の診断、治療に

関するものなどである。

ひるがえって、我が国の臨床を顧みればいかがであろうか。「デンタルダイヤモンド」誌も含めた専門商業誌を読んでいると、患者の病態や障害程度を把握することなく、俺流、自己流、あるスタディーグループ流の得意とする治療法を、あらゆる患者に対して施している感を抱くのは、著者のうがちすぎであるやもしれぬ。本来、最初に診査・診断を行い、出された診断に応じた治療法を選択するのが、医療のあるべき姿に違いない。にもかかわらず、診断がなく、すべて同じ治療法を行う愚を冷静に再考してほしい。

本書の目的は、インプラントの世界的標準治療の臨床戦略とその根拠を、臨床ファクターを踏まえながら順序だてて述べることである。その根拠はエビデンスを踏まえ、バイオロジーに立脚していなければならない。たとえば、最初に解説する osseointegration という現象を創傷治癒の視点から理解することはきわめて重要であるが、この視点を臨床家は忘れがちである。なぜか。世の中にあふれる魅力的なインプラントは、これこそが osseointegration 獲得に最高であるがごとく宣伝される。しかし、osseointegration を生じる材料は生体に対して静的 (bio-inert) でなければならない。あくまで主役は

生体組織である。決して特定のメーカーのインプラントではない。インプラント表面に骨組織と軟組織の創傷治癒が、一定のレベルで生じることが必要なわけである。その治癒の過程を osseointegration という。すなわち osseointegration は生体組織の人工物への治癒形態を指す。インプラント（そのデザインや表面性状など）は、獲得条件の一つにすぎないことを知るべきである。

やや説明が煩にすぎた。しかし、著者は、日常臨床への誤りの少ないインプラント応用をピラミッドのごとく各ステップを積み上げて説明を試みた。バイオロジーの礎にエビデンスを重ね、症例を鳥瞰図のごとく俯瞰し、最後にエキスパートの経験を提示する手法で、インプラントを用いた歯科臨床の正攻法を述べたつもりである。その過程で病態の認識と治療計画の立て方、予後のリスクファクターをディスカッションして、世界標準のインプラント治療戦略を示す。

本書が、読者の日常臨床のなかでインプラント治療の応用法を調べる一助となれば、著者らの幸甚とするところである。

2009年 8月吉日

幕張にて 古賀剛人